2024年5月10日

～毎月10日は人権を考える日～

「と場（じょう）」の学習から学ぶ

先日、叔父が亡くなりました。満９０歳だったので、天寿を全うしたと言ってもいいと思います。叔父の眠る傍らで、「ひいじいちゃん、どしたん？」と５歳の子が父親に聞いていました。父親は、亡くなったということを説明していましたが、５歳の子どもには理解できにくいことのようでした。

この死について、子どもにどう説明していけば納得してくれるのでしょうか。生けるものは必ず死を迎えます。仕方のないことです。それだけではなく、私たちは生きているものの命を奪って、生きています。このことを正しく伝えることは、大事なことだと考えます。

部落問題学習では、「と場」の学習をすることが多くあります。そこから学ぶことを大事にしています。人間は、植物や動物の命をもらわなければ、自分自身の命を維持することができず、生物として存在ができません。他の命を奪うことが残酷だといったら、人間は生命を維持することができないのです。

このようにして人間は生きているにもかかわらず、と場で牛や豚の命を奪うことを悪いこととして捉え、と場の仕事を忌まわしいもの、けがれたものと考えているとしたら、それはまちがった考えです。

しかし、現在でも、と場で働く人を差別する人がいます。「動物を殺す残酷な仕事」、そんな仕事ができるのは「けがれた人間、自分たちとは違う人間」という差別意識や考え方があります。魚や植物でも命を奪うということでは同じはずなのに、動物だと残酷なことになるのはなぜなのでしょうか。これが、自分で意識していなくても、歴史の中で慣習として受け継がれ、未だに根深く残っている部落差別であり、と場差別なのです。

肉を食べるため、革製品を使うために動物から命をもらうことは、悪いことでも、忌まわしいことでも、けがれたことでもありません。人間の歴史の中で面々と受け継がれてきたことです。

と場に勤務されている方の言葉です。

『殺して命をもらっている。殺さなければ命はもらえない。そして、私たちの命が生き、存在する。』

『動物を殺すことは、「人間が生きていくためには仕方のないこと」なのではなく、「あたりまえのこと」なのです。だから、と場の仕事は特別ほめたたえられることでもないし、だからといって、決してさげすまれることでもない、社会に色々ある仕事のひとつにしかすぎないと思うのです。私たちに対する差別や偏見は絶対に許すことはできません。なぜなら、人間が人間を差別するということは、あってはならないことだからです。』

西条市人権教育協議会　　西条市人権擁護課